

長井長義博士の半生を映画化

日本の薬学の父、長井長義博士の偉業と生き様を紹介する映画、「こころざし〜舎密(せいみ)を愛した男〜」が、来年3月の完成予定に向けて9月にクランクインする。徳島大学の教員ら有志からなる実行委員会が製作。完成後は徳島県内の文化施設などで上映するほか、DVDを徳島県内の中学、高校、大学などに配布する。志を持って生きることの大切さを若者に知ってもらい、薬学に興味を持ってもらうことが映画製作の目的という。

蘇る“薬学の父”

徳島大有志が製作

監督は山田和広、脚本は旺季志ずか、音楽はタケカワユキヒデの各氏が担当。また配役では、長井長義役は西村和彦、父親の長井琳章役は大杉漣、妹の長井加加役は大塚ちひろの各氏が務める。

長井博士は、気管支拡張作用を持つエフェドリンを麻黄から発見したほか、日本薬学会の初代会頭を務めるなど、日本の薬学の基盤を作った。映画では、幼少期から化学に興味を抱き、エフェドリンを発見するまでの半生を描く。

1845年、徳島藩医である長井琳章の嫡男として生まれた長井長義は、元服して父の代診を務めるが、次第に、草木から有効成分を取り出せば病を治せるのではないかとの思いを強く持つ。「舎密」(化学を意味するオランダ語を日本語に音写した言葉)への

興味を抱き、長崎やドイツへの留学を経て、「化学によって日本の近代化に貢献する」との志を抱く。

84年に帰国した長井長義は、大日本製薬技師長、東京大学薬学科教授、中央衛生委員など産学官の要職に就く。翌年にはエフェドリンを発見。日本薬学会の初代会頭に就任すると、以後42年間会頭を務め、わが国の薬学の発展に尽くした。

映画化は約4年前、徳島県出身の山田監督、徳島大学薬学部長の高石喜久氏らが、徳島県内であった講演会後の打ち上げの場に同席したのがきっかけ。「長井長義という偉人がいたのに、徳島県の人はその存在をほとんど知らない」「志を持つ若者が少ない」として、映像化の実現に向け意気投合したという。

約3年前に、薬学部や工学部教員など徳島



7月22日にあった製作発表

大学の関係者、東京大学薬学部教員ら有志が集まり、渋谷雅之氏(元徳島大学薬学部長)を委員長とする「徳島大学長井長義映像評価実行委員会」が発足。製作費の確保に苦労しながら、今回の製作発表までこぎ着けた。

徳島大学薬学部の前身は、長井博士と地元有志の協力で徳島高等工業学校に設置された製薬化学部。こうした経緯もあって、徳島大学薬学部は「長井長義資料委員会」を設置し、長井家から寄贈された資料約800点、日本薬学会から貸与された資料約200点など、合計1000点を超える長井博士の資料の一元的な整理、保存、研究にも取り組んでいる。

7月22日に徳島大学で開かれた製作発表で、実行委員会委員長の渋谷氏は「未来を目指す若い人々に希望と勇気、元気を与えるものに仕上がれば大変うれしい」と話した。監督の山田氏は「偉人、長井長義の功績はもちろん、人間、長井長義とそれを支えた人たちという人間ドラマにしたい」。主演の西村氏は、薬系大学出身の父親から「気合いを入れてやれ」と激励されたエピソードも披露し、「この映画が、見ていただいた方の何かの特効薬になれば」と語った。

映画の製作費は約1億円。現在、徳島県内の製薬会社、化学会社、銀行、徳島大学などの支援を得て、目標額の約7割を確保できたが、3割はまだ不足しており、引き続き寄附や協賛を募集している。寄附者にはDVDが送られるほか、エンディングロールに名前が載る。問い合わせは徳島大学薬学部(☎088・633・7245)まで。



病棟ロビーには多くの患者が集まった

患者・医療スタッフと交流深める

東京薬科大学の管弦楽団「ハルモニア」有志が5月末、八王子市の東京医科大学八王子医療センターでミニコンサートを開き、入院患者とその家族、医療スタッフなどと、心温まる交流を行った。

このイベントは、同大学が2007年度から全学的に取り組んでいる「人間知を育む相互交流のプログラムの展開」(文部科学省の「学生支援GP」)の一環として開かれたもの。生命科学を学ぶ薬学生が、医療の現場である病院で、患者やその家族に、楽しい一時を過ごしてもらいたいという目的で企画された。

ミニコンサート開催に当たっては、病棟に掲示するポスターやプログラムを学生が手作り。当日はトトロの耳ヘアバンドをして、映画「となりのトトロ」の曲目などを演奏。見た目でも楽しんでもらえるよう、演出も工夫した。

演奏場所の病棟ロビーにはベッドのままの患者、車いすの患者など、約80人近くの患者やその家族、医師、看護師などが集まり、演

奏を楽しんだ。最後は学生の演奏で、「翼をください」を全員で合唱、一体感も深まった。

こうした取り組みに対し、演奏を聞いた看護師は、「患者や看護スタッフにとっても、安らぎの時を過ごせた。これを機会に、病院でのコンサートをもっと開いてほしい」、患者の家族からは「楽しかった。次はいつ?」など、今後も交流を深めたいとの声も聞かれた。

演奏した学生は、「緊張したけれど、とても楽しく演奏でき、いい経験になった。患者さんに喜んで聞いてもらい、機会があったらまた演奏したい」など、予想以上の反響の大きさに、驚きを隠せない様子だった。

学生支援GPで多彩な活動

同大学の「学生支援GP」は、学生・教職

東薬大「ハルモニア」

地元病院でミニコンサート

員の人間知を結集し、学生の人間力を高め、人間性豊かな社会人の育成を図り、社会に貢献する人材育成に資するため、▽世代交流▽学び▽地域交流▽健康▽研修・評価・広報—の5プロジェクトを展開している。

「世代交流」プロジェクトでは、学生は学内での仲間や教職員との交流にとどまらず、広く地域の人々などを招き、薬学・生命科学の特色を生かした活動を介して、交流を進めている。

また、「地域交流」プロジェクトとして、学生は自ら近隣の施設などを訪問し、高齢者や障害を持つ人と触れ合い、多様な価値観と向き合う体験を通し、人間知をより豊かに深く育んでいく活動にも取り組んでいる。

さらに、「学び」プロジェクトでは、学内で学生は基礎学力をより強固なものとし、苦手科目が不得意科目にならないよう、早期に学習のつまづきを解消する教育環境を整えている。

「健康」プロジェクトとしては、学生の自己理解を進め、青年期特有の悩みなどに、グループ形式で関わり、人間関係のあり方について体験学習している。

同時に、「研修・評価・広報」プロジェクトとして、教員は長期化した青年期を過ごしている学生への理解と対応方法について研修を進め、より安全な学生・教職員関係の創造を目指している。

これまでの活動としては、学内に先輩研究者、薬剤師を招聘して交流を深めると共に、「車いすバスケットボール体験講座」などを開催し、障害者とも交流を深めた。さらに、地域に出向いて交流する活動としては、小学校での環境教育、近隣の施設でのミニコンサート開催なども行った。